



Data

監督・脚本: アリス・ウィンクール
 出演: エヴァ・グリーン/マット・ディロン/ゼリー・ブーラン・レメル/ザンドラ・ヒュラー/ラース・アイディンガー/アレクセイ・ファターエフ/グレゴワール・コラン

👁️👁️ みどころ

宇宙開発や宇宙への旅をテーマにした映画は多いが、そのほとんどはNASA (アメリカ航空宇宙局) を舞台にしたもの。中国はその分野でも近時、急速に力を増しているが、フランスは？あなたは、ESA (欧州宇宙機関) を知っている？

宇宙飛行士になるには知力も体力も必要だが、女性の進出は？日本では女性宇宙飛行士・山崎直子が有名だが、フランスだって！しかし、ママさん宇宙飛行士の大変さは？子育てとの両立は？

1980年代後半の「アグネス論争」は懐かしい(?)が、それが再現されたかのような本作を観ると・・・さらに、本作ラストでは邦題に重要な意味があることがわかるので、それに注目！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■NASAは誰でも知っているが、ESAは？■□■

『ゼロ・グラビティ』(13年)、『シネマ32』16頁、『インターステラー』(14年)、『シネマ35』15頁、『オデッセイ』(15年)、『シネマ37』34頁、『ファースト・マン』(18年)、『シネマ43』42頁)等々を観れば、宇宙開発の分野では圧倒的にアメリカが優位に立っていることがわかる。そのため、NASA (アメリカ航空宇宙局) は日本でも有名で誰でも知っているが、あなたは欧州宇宙機関 (ESA) を知っている？宇宙開発の分野でも近時急速に米国に対抗してきているのは中国だが、フランスだって、まだまだ・・・。

しかして、本作はフランス人の宇宙飛行士・サラ (エヴァ・グリーン) が大活躍する (割と単純な?) 物語。

■□■女性ながら新ミッションのクルーに！すると子供は？■□■

7歳の娘・ステラ (ゼリー・ブーラン・レメル) を育てながら宇宙飛行士になることを

夢見て日々訓練に励む女性・サラは、「プロキシマ」とよばれるミッションのクルーに選ばれたから大喜び！しかし、それは同時に約1年もの間ステラと離れ離れになることを意味していた。そこで、サラは離婚した夫・トマス（ラース・アイディンガー）にステラの世話を頼むことになり、トマスは快くそれを承知してくれたから、ひと安心。さあ、明日からはクルーの1人として今まで以上の厳しい訓練が待っているが、サラはホントに大丈夫？

■□■同じ境遇の女性監督なればこそ、こんな問題意識を！■□■

本作の脚本を書き、監督したのは『裸足の季節』（15年）（『シネマ38』215頁）の脚本が絶賛された女性、アリス・ウィンクール。彼女自身も仕事しながら企画当時に8歳の娘を持つ母親だったらしい。そのため、自分と同じような子供のいる女性宇宙飛行士の親子関係について描きたいと思い、本作を完成させたそう。彼女の問題意識は、ヒロインと母親は両立できないの？ということだが・・・。

日本ではかつて「アグネス論争」なるものがあり、1988年にはそれが新語・流行語大賞の流行語部門の大衆賞を受賞した。これは当時、絶大な人気を得ていた歌手・タレントのアグネス・チャンが「子連れ出勤」したことに対して、作家の林真理子らが痛烈に批判したために生じたもの。この「アグネス論争」はその後、批判派・擁護派入り乱れてあらゆるメディアで賛否両論が繰り広げられ、約2年間続いた。しかして、本作でもクルー全員が受ける講義にサラがステラを同行させるシークエンスが登場するが、その可否は？その顛末は？

■□■サラは一杯一杯！しかし、この約束の不履行は？■□■

訓練をこなすだけで精一杯なのに、その合間にステラと連絡を取り、日常生活はもとより、学校の成績にも気を配らなければならないからサラは大変。いくら父親にその世話を委ねていても、母親としての気配りは不可欠だし、そのために要する時間も必要だ。そのためサラの時間はとにかく、いつも、いっぱい、いっぱい。そのため、「必ず〇〇しようね」と約束しても、100%履行できないのは当然で、そのたびにサラが「ごめんね」と謝っていたのは仕方がない。しかし、「打ち上げ前に、二人でロケットを見る」という約束は？

その約束が履行されていないことをステラから指摘された出発の前日、既にサラ達クルーは完全に隔離されている中でのガラス越しの会話だった。その埋め合わせは、宇宙での任務を終え、1年後に地球に戻ってきた時に。そうなるのが当然だが、アレレ、本作では？厳格に管理されているはずの宇宙飛行士にこんなことがあるの？アリス・ウィンクール監督のこんな脚本に私はかなり疑問だが、映画なら何でもあり・・・？さて、あなたのご意見、ご感想は？

■□■宇宙飛行士にも発信力が必要！■□■

2021年4月18日付日経新聞は、「宇宙飛行士 開かれる門戸」と題して、宇宙飛行士という職業について「『発信力』にも重き 夢と日常性が交錯する職業」と見出しを付け

たうえで、宇宙航空研究開発機構 (JAXA) が今秋、13年ぶりに宇宙飛行士候補を公募し、応募要件を1983年の初公募以来、一貫して求めてきた「自然科学系出身」を条件から外すことを検討していると報道した。そのココロは、「文系にも門戸を開く」ことだ。ちなみに、『コンタクト』(97年)では、ジョディ・フォスター演ずる天文学者は宇宙人とのコンタクトに成功していたが、そこでは彼女の「発信力」が重要だった。なるほど、なるほど・・・。

日本人の宇宙飛行士としては毛利衛や山崎直子が有名だが、今般、米スペースXの新型宇宙船クルードラゴンで4月22日に国際宇宙ステーションに向かう日米欧の宇宙飛行士4人のリーダーも、日本人の星出彰彦だ。また、本作ラストでも、サラのような“ママさん宇宙飛行士”が次々と紹介されるので、興味のある人は本作の鑑賞を機にJAXAに応募してみてもは？

2021 (令和3) 年4月21日記